

5. 福岡を中心とする地域間交流

ここでは福岡における編年関係を踏まえ、周辺地域との比較を行い、地域集団による交流の実態を明らかにしたい。対象地域として、良好な多層遺跡が認められる西北九州と東北九州を選んだ。西北九州は、元岡・桑原遺跡群58次地点第II層のデボに埋納されていた黒曜石の産地である針尾島に近い、佐世保市相浦川流域の岩下洞穴と泉福寺洞窟を取り上げる。東北九州は、草創期末以降の堆積物が厚く堆積した大分県九重町二日市洞穴などを紹介する。必要に応じて、他の地域も比較対象とした。地域間交流の実態を正しく理解するためには編年を踏まえねばならず、その点を考慮して議論を進めたい。

(1) 西北九州の様相

草創期から早期の遺物を包含する良好な多層遺跡として、長崎県佐世保市の相浦川流域に所在する岩下洞穴と泉福寺洞窟がある。その北部に位置する、福井洞穴など佐々川およびその支流の福井川流域の諸洞穴とともに日本を代表する洞穴遺跡群である。

岩下洞穴は、相浦川中流域の標高約200mの砂岩の路頭下の、東南の方向に開口した洞穴遺跡である。最大4m程度の堆積土は10枚の自然層に分けられ、VII層を除き遺物が包含されていた（麻生1968）。IV層とIVb層が赤褐色を呈し、VII・VIII層が黄白色、IX層が黄灰色を呈している。泉福寺洞窟は、相浦川中流域左岸の標高89.5m地点に位置し、南西から西側に開口する4つの洞穴からなる。対岸には岩下洞穴が所在し、周辺には数か所の洞穴遺跡がみられる。堆積層は大きく12層に分けられ、旧石器時代から歴史時代まで長期間利用されている。日本を代表する洞穴遺跡で、細石刃文化の厚い堆積層（5層～11層）が認められ、その変遷が明らかになった。3a層が極めて特徴的な赤色粘質土である（麻生編1985）。赤色土壌は温暖期、白・灰色土壌は寒冷期に堆積したものと思われる。周辺の洞穴遺跡でも、赤色土層からは押型文土器が出土している。ヒプシサーマル期（7000～5000BP）より前ではあるが、急激に温暖化する時期ではある。

土器の様相

岩下洞穴IX層は、炉址周辺に石鏃、尖頭状石器、スクレーパー類、使用痕ある石器、敲石、凹石、磨石、石核などが出土し、土器はその東側、東南方向への自然傾斜にともない堆積が認められる。条痕文・無文土器が出土し、底部は平底が認められることが注目される。

VIII層も条痕文土器や無文土器が確認されている。一部、山形の押型文土器が見られるが混入であろう。出土量が確保されていないためか、詳細は報告されていないものの、IX層と類似したものである。

VI層は人骨埋葬穴、炉址、配石が確認されている。土器は遺構から離れた位置にまとまっており、無文土器を主体として、条痕文土器・押型文土器等が見られる。弥生土器や阿高式土器などもみられるため、混入は多いものと考えられる。

V層は3基の炉址と多数の埋葬人骨が検出されている。遺物の分布は西側に偏り、無文土器・押型文土器等の出土が確認されている。轟式などの新しい個体もみられ、混入しているものも見られるが、条痕文調整をもつ刺突紋土器も出土しており、やや古い様相をもっている。しかし、横位の楕円文・山形文・格子目文等を伴っている。押型文の文様サイズも大小さまざままで、内面に原体条痕をもつものや一点山形文をもつ土器はベルト状に施文で口縁部付近に穿孔が見られるものもあり、時間幅がある、あるいは、一部に押型文土器文化層が存在する可能性が考えられる。

IVb層はV層同様に埋葬人骨が認められる。押型文土器が中心でベルト状施文の個体はみられない。内面に原体条痕文をもつものも認められるが、この層で初めて円形刺突文が確認されるようになる。さらにIV層は円形刺突文土器の出土比率が増加する。もちろん曾畠式土器等の時期的に新しいものも含まれ、一部混入していることは否めないが、ベルト状施文のない押型文土器が中心となっている。

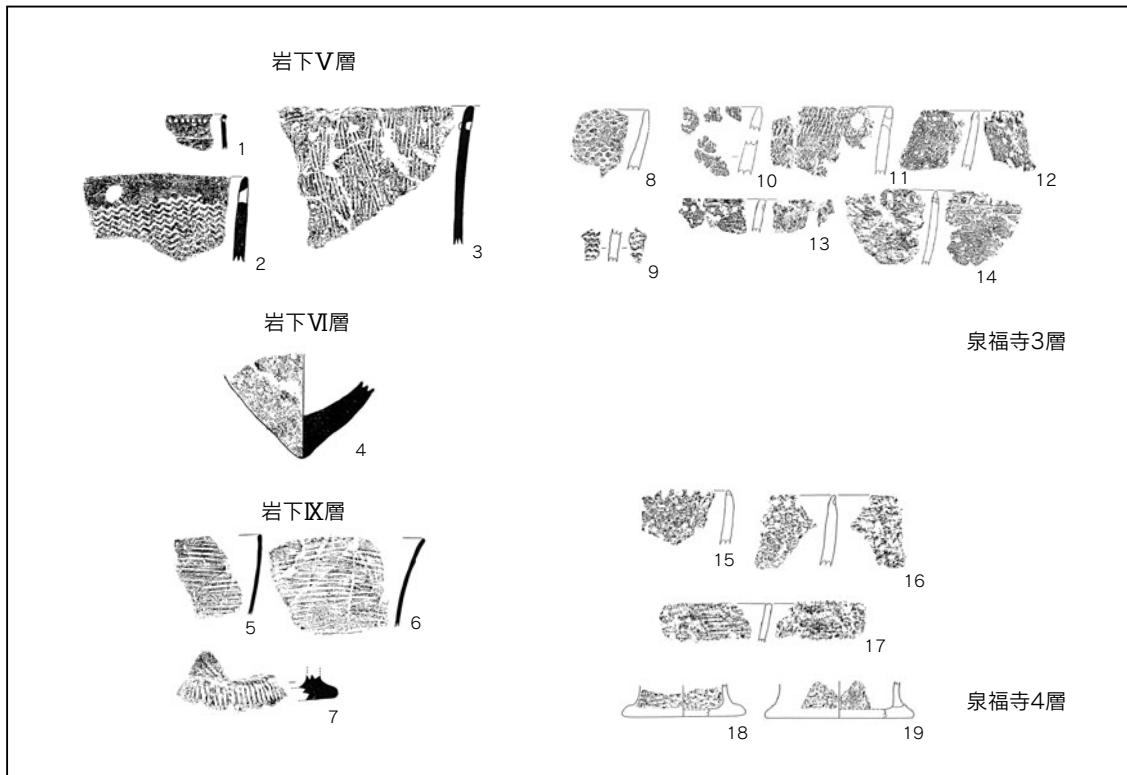


図140 西北九州における土器変遷(1/6)

泉福寺洞窟4層は4a～4g層から条痕文土器の出土が確認されている。岩下洞穴IX層と同様平底をもつ。条痕文の施文方法も横方向のみである。条痕文土器が主体で出土しているが、一部4a層において刺突文土器の出土が確認できる。刺突文は縦長の楕円形を呈し、押引きの手法で施文されたものと考えられる。泉福寺洞窟の4層は、いくつかの文化層に分かれる可能性が出土する土器の様相からも指摘できる。

3層は3a～3g層からなる。押型文土器が主体で出土しており、一部刺突文も見られる。押型文土器の中には連珠状のもの、格子目文、山形文がみられる。楕円文は大小サイズが混在し、形状も米粒状のものからレンズ状のものまで多種見られる。時間幅が存在しているが、内面に原体条痕がみられないことから早水台以前に収まるものと考えられる。

石器の様相

岩下洞穴IX層は平底の条痕文・無文土器に伴い、石鏃、尖頭状石器、スクレーパー類、使用痕ある石器、敲石、凹石、磨石、石核など216点が出土している(図141 89～101)。遺物は炉址周辺にスクレーパー類など、その東側に石鏃が密集している。スクレーパー類は石鏃の2倍近く認められ、黒曜石製の小形円形搔器に特徴がある。特に、黒曜石の分厚い剥片に樋状の細調整を施し、円形に加工したもの(98)が本遺跡を特徴づけている。このような小形円形搔器は西北九州の黒曜石円礫と結びつき、独自に発展した形態である。石鏃は浅い抉りの三角形鏃を主体とし、正三角形に近いもの(93～97)と細長の二等辺三角形鏃(89～92)がある。その中には、第一次剥離面を残すものの(97)を一定量含み、先端が円味を帯びるもの(96)もある。部分磨製石鏃は認められず、石槍も組成されておらず、本層段階で出現していない可能性が高い。

VIII層も条痕文土器や無文土器に伴い、石鏃、石槍、スクレーパー類、使用痕ある石器、石核、磨石など126点が検出されている(図141 64～76)。IX層ほどでないが、スクレーパー類の割合が高く、小形の円形刃部搔器(75)も組成されている。石鏃は細長の三角形鏃を主体に組成し、抉りの

ないものが多い。部分磨製石鏃（72・73）が一定量存在している。磨製技術は脚部の尖る石鏃に施しており、三角形鏃には認められない。石槍は加工の荒い基部の破損品（74）だが、薄手の細長品と思われる。石核の中には、両面へ周辺から加撃を施したものがある。

VI層は人骨埋葬穴、炉址、配石が確認されている。無文土器などに伴い、石鏃、石槍、尖頭状石器、スクレーパー類、使用痕ある石器、石核、石皿、砥石、磨石、ハンマー・ストーンなど1,130点が検出されている（図141 38～63）。押型文土器など混在している遺物も認められる。石鏃は抉りが深く脚部の尖るものを主体とし、抉りの浅い正三角形に近いものなどがある。部分磨製石鏃も半数程あり、その中には全研磨に近いものもある。石槍は定型化したものが認められ、細身の柳葉形に近いもの（57～59）が多く、丁寧な細調整が施されている。V層ほどではないが、部分磨製石槍（56）も組成されている。スクレーパー類の割合も高く、円形搔器も（62・63）認められる。V層例と共に混入と考えられる。

VI層より上層は埋葬人骨（墓穴）に特徴があり、洞窟利用がそれまでの旧石器時代と類似する在り方から、遺構・遺物分布が劇的に変化している。まさしく、縄文時代的な空間利用が始まったのではないかと思われる。

V層は3基の炉址と多数の埋葬人骨が検出されている。無文土器などに伴い、石鏃、石槍、尖頭状石器、スクレーパー類、石匙、石錐、彫器、使用痕ある石器、石核、石斧、石皿、砥石、磨石、ハンマーストーンなど1,250点が検出されている（図141 13～37）。石鏃は引き続き脚部の尖るものが主体で、部分磨製石鏃の割合も高い。側縁が円味を帯びるものも認められる。鍬形鏃（18～20）も含まれているが、混入と思われる。石槍は丁寧な細調整を施した柳葉形のもの（31～34）が多く、VI層より研磨痕のあるものが多い。スクレーパー類は鍬形鏃と同様混入品が認められる。

IVb層も埋葬人骨が認められ、押型文土器などと共に石鏃、尖頭状石器、スクレーパー類、石匙、石錐、彫器、使用痕ある石器、石核、石斧、石皿、砥石、磨石など138点が検出されている。石鏃は鍬形鏃、脚部の尖るもの、抉りの浅い三角形鏃が認められる。石核の中には両面に剥離面の認められるものもある。

IV層は押型文土器や曾畠式土器などと共に、石鏃、石槍、尖頭状石器、スクレーパー類、石匙、石錐、彫器、使用痕ある石器、石核、礫器、ハンマーストーン、石斧、石皿、砥石、磨石など1,225点が検出されている。石鏃は鍬形鏃、脚部の尖るもの、三角形鏃などが認められる。部分磨製石鏃も一定量組成されている。剥片鏃も出土しているが、混在と考えられる。柳葉形石槍や部分磨製石槍も認められるが、混在の可能性もある。

泉福寺洞窟4層は4a～4g層に包含されており、複数の文化層からなるものと思われる。石鏃292点、尖頭器16点、彫器18点、スクレーパー類329点、使用痕ある石器262点、礫器3点、石斧1点、ハンマーストーン3点、磨石3点、砥石14点、剥片3,770点、碎片967点、石核221点、原石6点など6,412点が検出されている（図141 77～88）。岩下洞穴IX層と同様スクレーパー類の割合が高く、特徴的な円形搔器（86・87）が多数組成されている。その中には、背面に細調整を施したものもあるが、大原D・元岡型スクレーパーのような縦長のものは組成されていない。西北九州で大原D・元岡型の発達は弱いが、菰田洞穴には類似品があり（川内野編2003）、存在していた可能性は高い。スクレーパー類は厚手の貝殻状剥片や幅広剥片を素材とし、やや大形のものも認められる。石鏃は三角形鏃が主体を占め、岩下洞穴IX層に比べると抉りのない細長の二等辺三角形鏃の割合が高い。抉りのある石鏃（84・85）も意外に多く、その形態の部分磨製石鏃も組成されている。その他、周縁部のみに細調整を施し、第一次剥離面を大きく残す石鏃（82）も認められる。石槍は荒い調整の細身柳葉形を呈するもの（88）である。

3層も3a～3g層からなり、2枚以上の文化層からなる。最上層の3a層が赤色粘土層である。石鏃

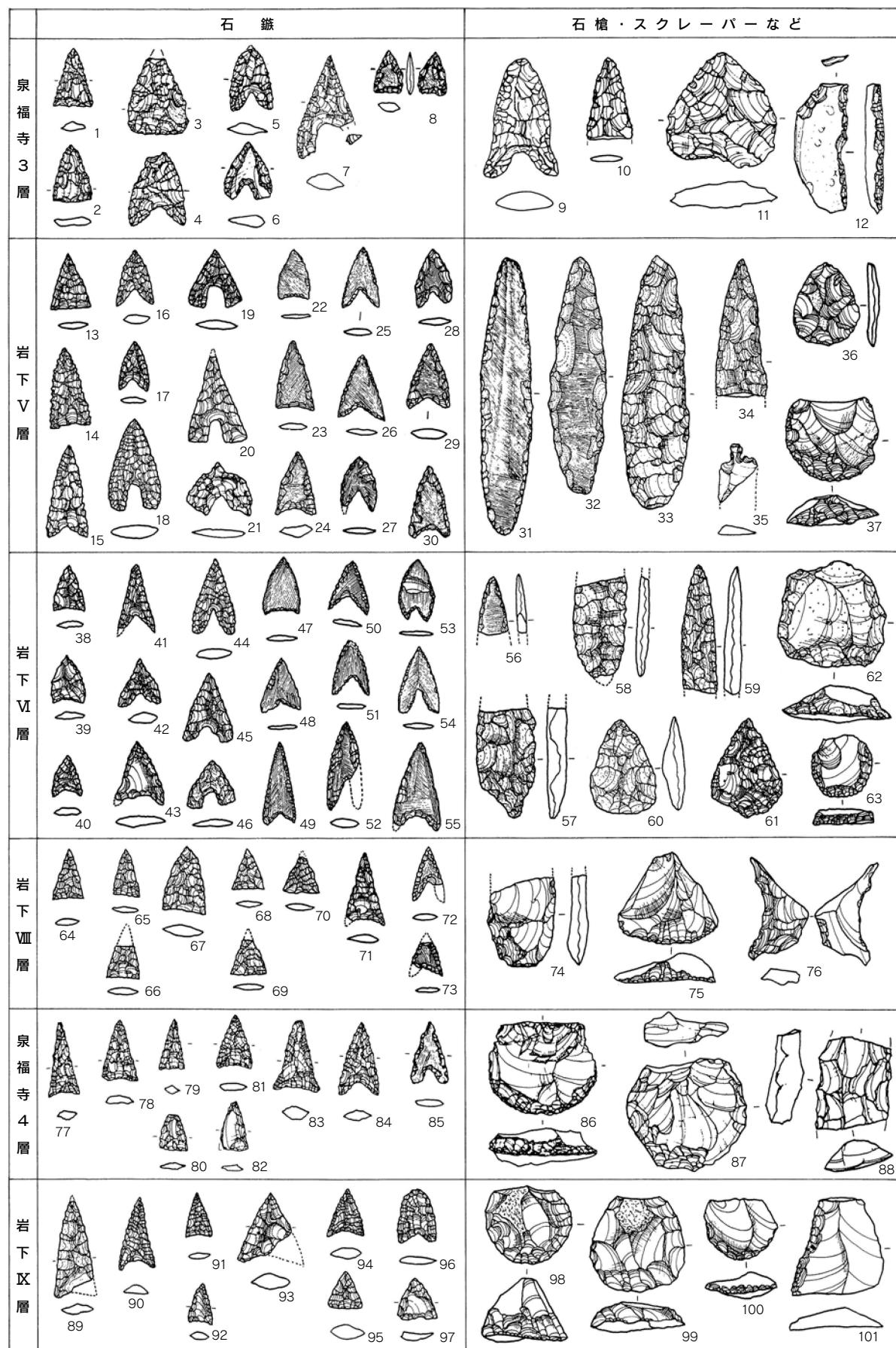


図141 西北九州における石器変遷(1/2)

109点、トロトロ石器1点、尖頭器8点、彫器7点、スクレーパー類159点、石匙1点、使用痕ある石器125点、礫器2点、石斧1点、ハンマーストーン1点、磨石10点、砥石17点、剥片1,825点、碎片1,697点、石核63点、原石11点など4,453点が検出されている（図141 1～12）。石鏃は新たに大形の鍔形鏃（7）が組成されるが、脚部の尖るものや三角形鏃、基部が丸味を帯びるものなどがある。部分磨製石鏃も組成されている。トロトロ石器（9）は灰白色チャート製で、著しい磨痕が認められる。石槍は丁寧な細調整を施した優美な細身のもの（10）であり、尖頭状石器は幅広寸詰まりの形態（11）である。石槍は押型文期以前の所産である可能性が高い。スクレーパー類は4層と異なり、定型化したものが少ない。

岩下洞穴における堆積土の色調などから、条痕文土器を伴う文化層（IX・VIII層）は寒冷化の著しいヤンガー・ドリアス期に位置づけられる可能性が高い。いずれもスクレーパー類の割合が高く、特徴的な円形搔器を伴っている（堤2000、萩原2001・2008）。石鏃は二等辺三角形鏃を主体とする点で共通し、岩下IX層→泉福寺4層→岩下VIII層と小形化傾向が認められる。しかも、新しい文化層には抉りを施さないものが多くなり、部分磨製石鏃も組成されるようになる。この変化は、福岡における大原DⅢ層→大原DⅡ層・元岡3次中層→松木田4次2区という変遷と全く同じである。両地域は黒曜石原石の供給を通して交流があり、定形石器の器種組成や形態へも影響を及ぼしたと考えられる。

岩下VIII層には脚部の尖る石鏃、部分磨製石鏃、石槍が組成されており、元岡・桑原58次地点IV層の直前の様相と思われる。この後、さらに脚部の尖る石鏃や部分磨製石鏃の割合が高くなると考えられる。岩下VIII層段階で荒い調整の石槍は、58次地点IV層・Ⅲ③層において細長品として完成すると考えられる。西北九州にはこの段階の文化層は認められないが、福岡で円形搔器が引き続き組成されていることからも、同様の石器群が存在していたと考えられる。岩下洞穴はVI層以降も円形搔器が検出されている（37など）が、混入と考えられる。

岩下VI層は押型文土器期などの遺物が混在しているが、松木田3次地点段階（米倉2001）の文化層と考えられる。脚部の尖る石鏃主体で、部分磨製石鏃の割合も高い。側縁が丸味を帯びる石鏃も組成されている。完成した優美な形態の細身石槍が認められ、部分磨製品も存在する。特徴的な縦長のサイド・スクレーパーも認められる。

岩下V層は上層と下層の遺物が混在していると思われ、純粹な石器群を把握することは困難である。しかし、福岡の元岡58次地点第Ⅲ①・②層や3次地点中層（菅波ほか2004）と共に通点が多いように思われる。脚部の尖る石鏃を主体に、三角形鏃など多様な形態が認められる。ただ、部分磨製石鏃の割合や部分磨製を含めた石槍の形態は、松木田段階に類似しているように思われるが、これらは多くはVI層からの混在と考えられる。

岩下・泉福寺洞窟では押型文土器と混在しているが、天神洞穴ではその下層から刺突文土器と無文土器が検出されており、部分磨製を含む石鏃、石槍などと共に伴している。このように、西北九州の早期前半は多様な土器や石器が認められるが、詳細編年は確立されていない。

その後鍔形鏃が出現し、トロトロ石器など新しい器種が現れる。岩下洞穴IVB・IV層、泉福寺洞窟3層などである。しかし、型式単位での細かな編年を構築出来る遺跡は現在のところ認められない。この頃温暖化により海面が進出しており、人類も海との関係を深めたと思われる。岩下洞穴ではマダイやカノコガイ、スガイ、ハマグリなどの貝類が検出されている。

（2）東北九州の様相

東北九州を代表する遺跡として二日市洞穴、成仏岩陰、新生遺跡を取り上げる。二日市洞穴は、熊本県境に近い大分県九重町に所在し、筑後川上流の玖珠川とその支流松木川が合流する地点の1km東側の標高363mに位置する。耶馬溪溶結凝灰岩が松木川の浸食によって二つの巨岩に分離されたもの

で、河床面との比高は9mである。15層の自然層が堆積しており、9枚の文化層が確認されている（橋1980、竹野・綿貫2004）。VIIa層が特徴的な赤褐色砂質土層で、押型文土器が検出されている。また、XV・XIII・XI層は灰白色砂質土層で、寒冷期に堆積したものと思われる。成仏岩陰は、大分県国東半島中央部の大嶽山北側山麓に所在する。遺跡の標高は約140mで、田深川からの比高23mである。5層の自然層が認められ、II層（前期）、III・IV層（早期）、V層（草創期末）と四枚の文化層がある（坂田1972）。押型文土器の初期に位置し無文土器を主体とする新生遺跡は、大分県大野川の支流野津川のさらに支流都松川の上流源泉地付近に位置している。

土器の様相

二日市洞穴最下層の第9文化は、XIII～XIV層より検出されている。条痕文土器・無文土器が出土する。底部は平底である。大原D14区のような踏ん張った形状はしていない。条痕文の方向も縦方向は存在せず、横あるいは斜め方向である。

第8文化層は、XII層を中心とする。条痕文土器・無文土器が確認され、直立する口縁部をもち、底部は平底に近い丸底が特徴である。口縁端部には刻目が見られる。

第7文化層はX層を中心とする。条痕文および無文土器で、底部は丸底である。口縁部付近の条痕文の最終調整方向に縦方向が採用されている。器壁は1cm以上の厚みがある。

第6文化層はVIIb・VIIc・IX層最上部で検出されたもので、条痕文・無文土器が出土している。底部はこれまでの層と違い、尖底あるいは乳房状尖底となる。直口する口縁部が特徴で、下からナデ上げるようなナデが見られる。

第5文化層はVIIa層を中心とし、条痕文・無文土器を包含している。底部は乳房状尖底あるいは尖底で、口縁部は内湾するものと外に開くものの両者が認められる。

第4文化層（下層）はVIIc層下部に包含され、押型文・条痕文・無文土器が出土し、底部は尖底で

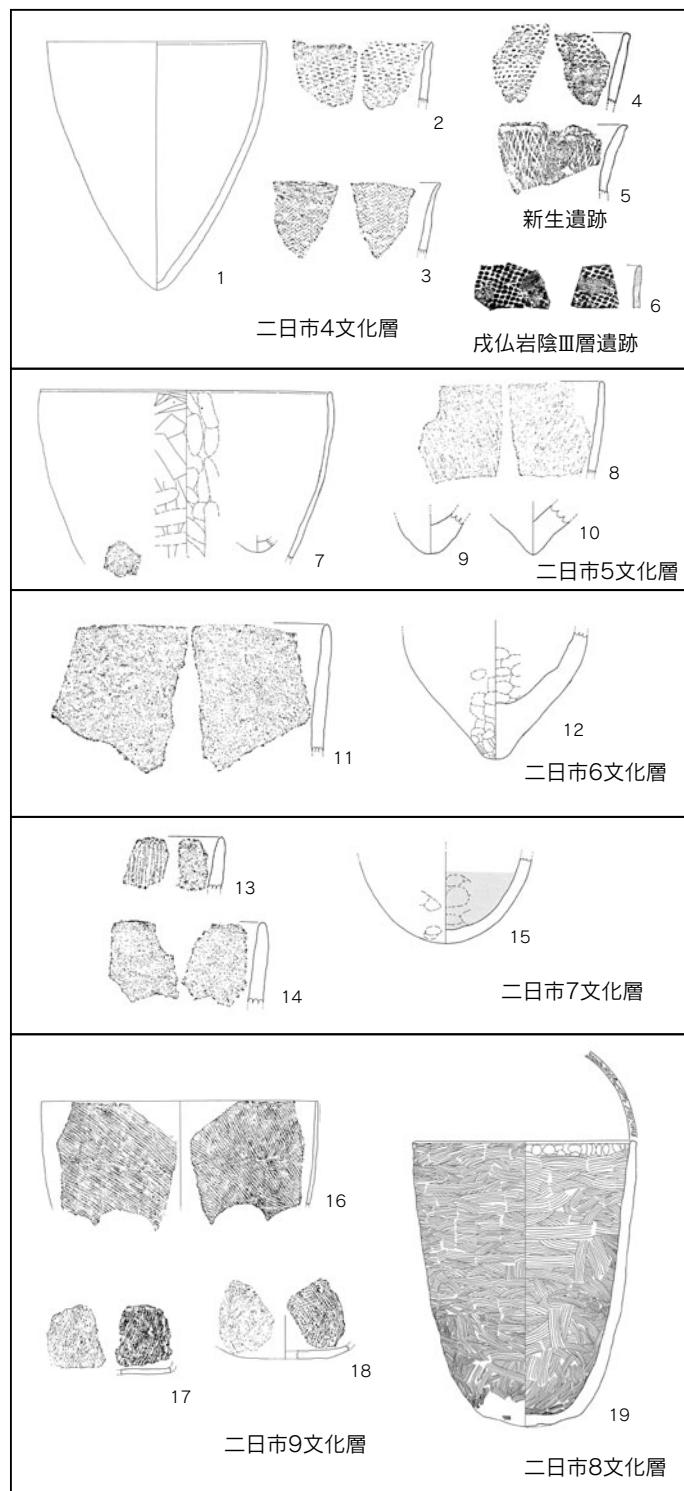


図142 東九州における土器変遷(1/6)

ある。直口あるいは外傾する口縁部をもち、口縁部付近は横あるいは縦方向の調整を施す。押型文土器は、横位の楕円文や小型楕円文、連珠状に近い山形文等が見られる。一部、ベルト状施文をもつものも確認されている。第4文化層（上層）では、原体条痕をもつ個体が確認されていることより、上層は早水台式以前と考えられ川原田式との間を埋める稻荷山式として認識される層である。

成仏岩陰Ⅲ層は縄文時代早期に位置づけられる。押型文土器（早水台式）と共に格子目文の押型文土器が出土している。

格子目文の押型文土器はベルト状施文されており、二日市洞穴第4文化層（下層）と類似している。

新生遺跡は大分県野津町に所在する集石炉12基を伴う大規模遺跡である。尾根状の微高地を中心には約1mにわたって堆積する縄文時代文化層を検出された。西・東縁辺部への緩慢な傾斜にしたがつた堆積が確認されている。文化層からは押型文土器が内面に原体条痕のあるものから、格子目文・山形文・小さな米粒状を呈するものまで多種にわたっており、ベルト状施文が施されている個体もみられ、押型文土器の中でも古相を呈すると考えられる。

石器の様相

二日市洞穴最下層の第9文化層（図143 66～93）は、XⅢ～XⅣ層より検出されている。条痕文土器・無文土器とともに、石鏸64点、石槍8点、石錐1点、斧形石器1点、スクレーパー類8点、加工痕・使用痕ある石器8点、敲石・磨石18点、石核7点、剥片・碎片990点出土している。石鏸は抉りの浅い三角形・二等辺三角形のものが主体を占める。抉りのない平基鏸は認められない。抉りのやや深いもの（86・87）もある。脚部は尖るもの（66など）が主体で、円味を帯びるもの（84など）が少数含まれる。鋸歯状細調整を施したものもあるが、顕著な存在でない。石槍の一部は有舌尖頭器とされているが、完形品がなく全体の形状は不明である。細長の優美な形態（88・89）と、小形の短いものがある。石錐は先端に細調整を加え、断面を菱形に整えている（92）。

第8文化層（図143 48～65）は、XⅡ層を中心に包含されている。条痕文土器・無文土器に伴い、石鏸44点、石槍2点、楔形石器1点、スクレーパー類6点、加工痕・使用痕ある石器8点、敲石・磨石18点、剥片・碎片138点が検出されている。三角形鏸は幅広で抉りの浅いもの（49など）が主体だが、抉りが深く脚部の尖るもの（57など）が一定量組成されている。57のように脚部の抉りが特徴的なものがあり、58次地点第IV層例と良く類似している。側縁は直線状のもの（54など）と円味を帯びるもの（60など）がある。スクレーパー類は先端に細調整を加えた搔器で、背面調整を加えた特徴的なものがある。第9文化層と同様、西北九州や福岡に比べスクレーパー類の数が少ないと見える。石槍は基部付近に最大幅のある幅広の形態である。

第7文化層はX層を中心に包含され、石鏸14点、スクレーパー類7点、加工痕・使用痕ある石器3点、敲石・磨石4点、剥片・碎片56点が出土している。石鏸は平基式の三角形鏸などがある。幅広のやや抉り深いものは、尖るものと円味を帯びるものがある。縦長で脚部の尖るものは、脚部が肩のように張り出している。スクレーパー類は、縦長剥片の両面あるいは片面に細調整を施した削器である。

第6文化層（図143 34～47）はVIIIb・VIIIc・IX層最上部に包含され、石鏸22点、石槍4点、スクレーパー類8点、加工痕・使用痕ある石器30点、敲石・磨石10点、有孔円盤1点、その他1点、石核8点、剥片・碎片315点が出土している。石鏸は抉りのない平基式は認められず、脚部の尖るもの（42など）とやや円味を帯びるもの（35など）がある。部分磨製石鏸（44）が1点認められ、側縁が円味を帯びるものもある。石槍は定型化したやや細身のもの（46・47）である。

第5文化層はVIIIa層に包含され、石鏸14点、スクレーパー類8点、加工痕・使用痕ある石器16点、敲石・磨石14点、剥片・碎片150点出土している。石鏸は脚部が円味を帯びた例が多く、両面に第一次剥離面を残したものも多い。

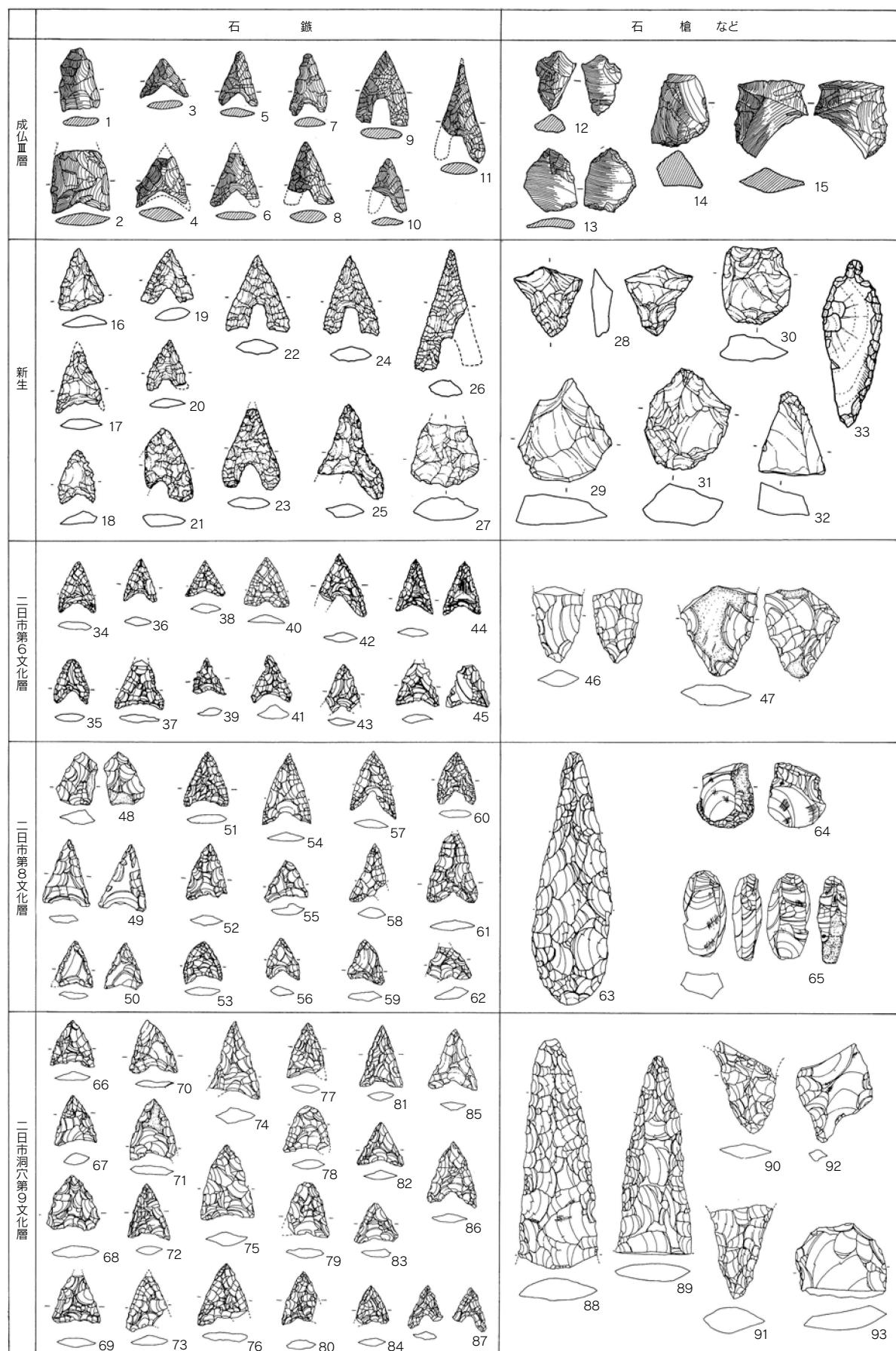


図143 東九州における石器変遷(1/2)

第4文化層下部はVIIc層下部に包含され、無文土器などとともに、石鏃8点、スクレーパー類2点、加工痕・使用痕ある石器6点、剥片・碎片136点が検出されている。第4文化層上部はVIIa・b層に包含され、稻荷山式押型文土器などとともに、石鏃16点、スクレーパー類2点、加工痕・使用痕ある石器20点、敲石・磨石2点、剥片・碎片418点出土している。第4文化層上部は典型的な鍬形鏃に特徴があり、下部は脚部の尖る小形石鏃などが検出されている。スクレーパー類は、上部・下部文化層共に両面調整による大形のものが認められる。

成仏岩陰V層は丸底の無文土器と共に、石鏃5点、スクレーパー類2点、加工痕・使用痕ある石器5点、剥片8点、凹石17点、ハンマーストーン1点、磨石6点、石皿1点が検出されている。石鏃は基部が凸形のもの1点、抉りが無いか浅いもの4点である。後者は幅広品2点、細長のもの2点で、平均長1.4cm、幅1.4cm、重さ0.4gと小形である。

Ⅲ層は押型文土器（早水台式）と共に、石鏃19点、スクレーパー類6点、加工痕・使用痕ある石器54点、剥片209点、石核21点、礫器1点、凹石27点、ハンマーストーン4点、磨石5点、石皿2点が出土している（図143、1～15）。石鏃は抉りの深いものが多く、鍬形鏃（8～11）と脚部の尖るもの（3～7）がある。脚部の尖るものには、鋸刃状細調整を施したものがある。大きさの平均は長さ18.76mm、幅17.84mm、重さ0.94gで、V層に比べると大形である。

新生遺跡は集石炉12基を伴う大規模遺跡で、石鏃、尖頭状石器、スクレーパー類、楔形石器、石錐、石匙、打製石斧、環状石斧、礫器、磨石、凹石、石皿などが検出されている（栗田ほか1984、図143、16～32）。石鏃は大型の鍬形鏃（22～26）を主体に、中・小形鍬形鏃（19～21）、抉りのないか浅い正三角形鏃（16～18）、基部のやや凸形の石鏃（27）などが検出されている。それらの平均の長さは2.67cmであり、二日市洞穴例と比べると格段に大形である。

福岡地方や西北九州とは若干の違いはあるが、基本的には同じ法則性が認められる。石鏃は、三角形鏃→脚部の尖るもの→鍬形鏃、という基本的変遷である。部分磨製石鏃はほとんどないが、二日市洞穴第6文化層に1点認められ、松木田遺跡3次などと同時期と思われる。細かな点でも、共通点がある。二日市洞穴第9文化層の石鏃はその大部分が幅広の正三角形に近いものだが、岩下洞穴IX層や大原DⅢ層と同様浅い抉りが認められる。その後、福岡や西北九州では小形化し抉りのない二等辺三角形へと変化するが、成仏岩陰V層も抉りのない極めて小形の石鏃が認められる。東北九州は細長の二等辺三角形のものが少なく、幅広製品が主体となる点は福岡などとの違いと言える。

脚部の抉りに特徴のある二日市洞穴第8文化層の石鏃は、58次地点第IV層と同一のものと考えられ、製作技術が伝播したものと考えられる。両側縁が円味を帯びる石鏃が、二日市洞穴第8文化層に認められる。東北九州では西北九州や福岡より早く定着したと考えられ、脚部の尖る石鏃の出現とほぼ同時期に登場したものと思われる。二日市洞穴第8文化層から第6文化層にかけて脚部の尖る石鏃が主体を占めるが、福岡と同様小形化傾向が認められる。三角形鏃も出土しているが、幅広の正三角形鏃であり、二等辺三角形鏃を組成する福岡とは異なっている。押型文土器の出現と共に大形の鍬形鏃が登場する点は、他の地域と同様である。

スクレーパー類は、福岡の草創期末に特徴的な縦長の背面調整を施したものは認められない。堆積土や石器の特徴から、ヤンガー・ドリアス期に位置づけられる二日市洞穴第8・9文化層においても円形刃部搔器は殆ど認められず、スクレーパー類の割合もあまり高くない。現状の資料で見る限り、大分地方では円形刃部搔器の発達が弱いように思われる。大分地方は、全九州的に認められる寒冷化に対応していないと考えられる。石槍は二日市洞穴第9文化層で既に定型化しており、発達の弱い福岡や西北九州と異なっている。その後も押型文土器文化層まで継続して存続しており、二日市洞穴第6文化層では福岡と同様の細身の石槍が組成されているようである。

石器群は、全体としてみると福岡や西北九州とやや異なるように思われるが、基本的な変化傾向は

同じと思われる。特に石鏃は他の地域と同様、草創期末、早期初頭、早期中葉に大きな変化点が認められるのである。ところが、スクレーパー類と石槍には違いがあるようである。その原因については、現段階では明らかでない。

(3) 地域間交流と元岡・桑原 58 次地点

土器からみた地域間交流

西北部九州・北部九州・東北部九州の当該期の遺跡に着目した際、堆積土に関しては第3章IIにおいて共通性が見られることは先に触れた。ここでは、土器の特徴から文化層の併行関係を中心に検討し、共通性や地域性を抽出することで、地域間における物流・情報の伝達のありかたを検討したい。

まずは底部に着目してみる。綿貫氏の研究成果によれば、時間の流れをより反映する属性は底部であり、東北九州においては平底形・平丸底形→平丸底形・丸底形→広角尖底形・広角乳房尖底形→広角乳房尖底形・狭角乳房尖底形→狭角乳房尖底形・尖底形→尖底形という漸移的な変化をたどるとされている（綿貫1999）。北部九州において言えば、平底・上げ底→平底・尖底・乳房状尖底→尖底・乳房状尖底→尖底への大まかな変化をたどることができる。東北九州と異なり広角・狭角は共存することもあり、時間を表すというよりも土器のサイズに左右される側面が強いように思われる。一方西北九州では、底部の資料が少ないが、傾向として岩下IXや泉福寺4層において平底が確認され、続く岩下VI層では乳房状に近い尖底、その後尖底への変化が確認できる。それぞれの地域で共通していることは、平底→乳房状尖底→尖底という大きな流れが見られることである。共通する底部形態において併行関係を検討するならば、平底を特徴とする岩下IX・泉福寺4層=大原D14区、やや新しい様相を呈する二日市洞穴9層が一段階新しい時期に位置する。やや崩れた乳房状尖底である段階は、岩下VI層=松木田3次=二日市洞穴6層、尖底の段階では、押型文出現以前では柏原FIII層=二日市洞穴5層・中原遺跡SK31、押型文出現以後では第4章4において触れたように、元岡・桑原58次IIAユニットは川原田式併行、IIB・Cユニットは稻荷山式古段階、I層が稻荷山式新段階となる。したがって、東北九州では二日市洞穴第4文化層（下層）がIIB・Cユニットと併行し、西北九州では岩下V層が対応する。

上記のような底部で見られた併行関係は底部形態以外の要素でも再検証できる。平底段階では、どの地域においても土器文様のセット関係は条痕文土器および無文土器で構成される点で共通している。やや崩れた乳房状尖底である段階では、土器のセット関係のなかで撚糸文土器が一定量確認される点や石鏃の脚部の形態の類似点が挙げられる。尖底の段階では押型文土器出現以前では小ぶりの円形刺突文土器（刺突③）が土器のセット関係のなかに含まれるようになる。底部の出土は確認できないが、小ぶりの円形刺突文の存在から岩下V層は同時期といえる可能性が高い。

さて、ここで問題となってくるのが、資料数量の確保が難しい段階や底部形状から類似性が認められない段階である。西北九州では岩下VII層がそれにあたる。底部形状から岩下IX層は大原D14区と同時期と考えられ、岩下VI層は松木田3次調査地点と同時期と考えられることからも、元岡・桑原遺跡群58次III③あるいはIV層との併行関係が導きだせるが、岩下VII層は無遺物層で、VII層出土資料は胴部の小片が中心であるため、個体同士の比較検討が極めて困難である。したがって、共伴する石器との関係性から検討するほかないので現状である。石器では、特に石鏃の形態から岩下VII層は58次VI層よりやや古く、草創期に位置づけられており、微妙な時間差が確認されている。この現象を土器において再検証し、併行関係を検討するべきであるが、これらは今後の課題としたい。

同様のことは、東北九州における二日市洞穴7・8文化層でも当てはまる。底部形態から大原D14区=岩下IX層よりもやや新しい段階に二日市洞穴9文化層が位置し、間空白があり松木田3次調査地点の時期=二日市洞穴6文化層が対応する。空白期間には元岡・桑原遺跡群58次のIV・III③

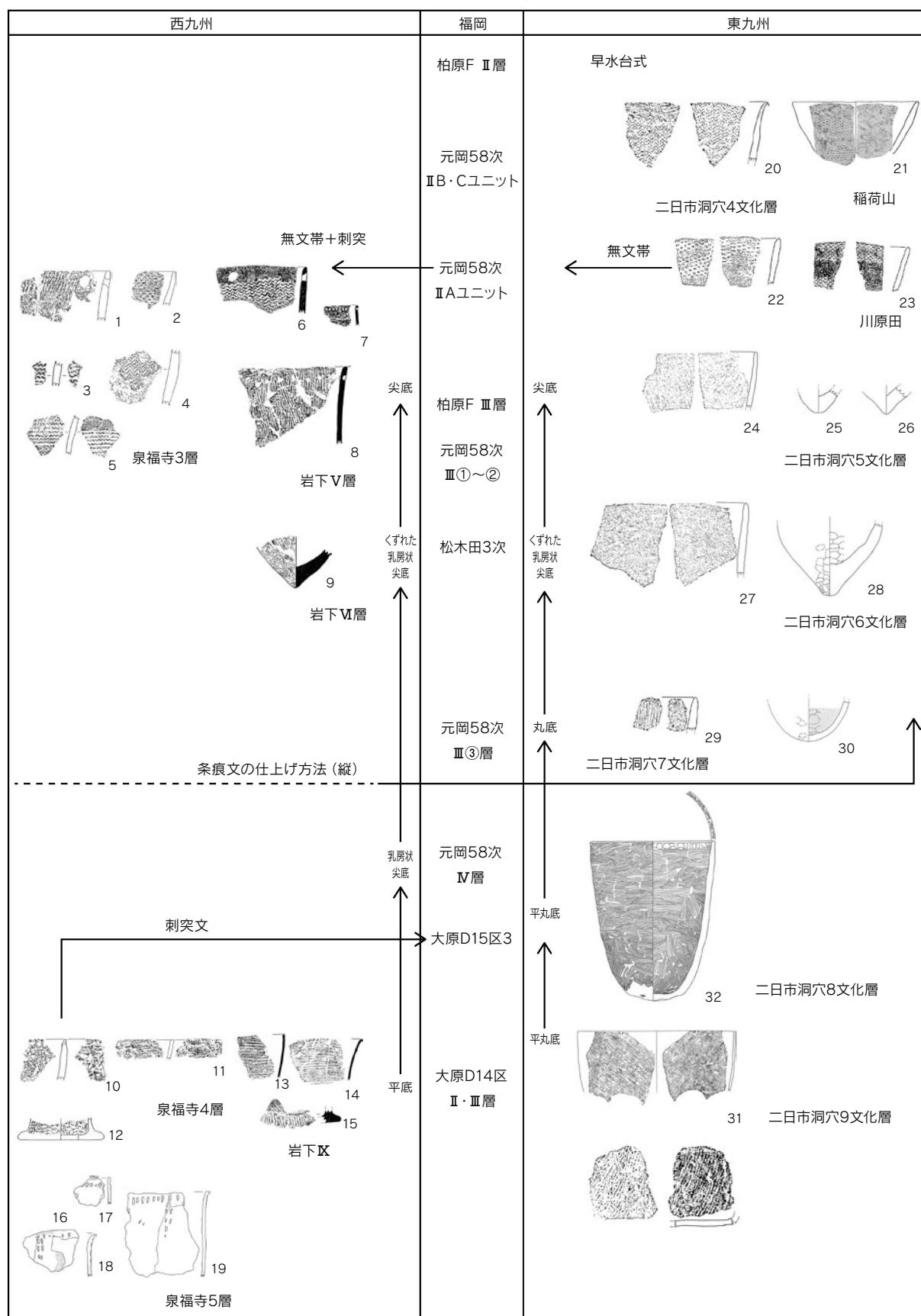


図144 土器にみる地域間交流の概念図(1/8)

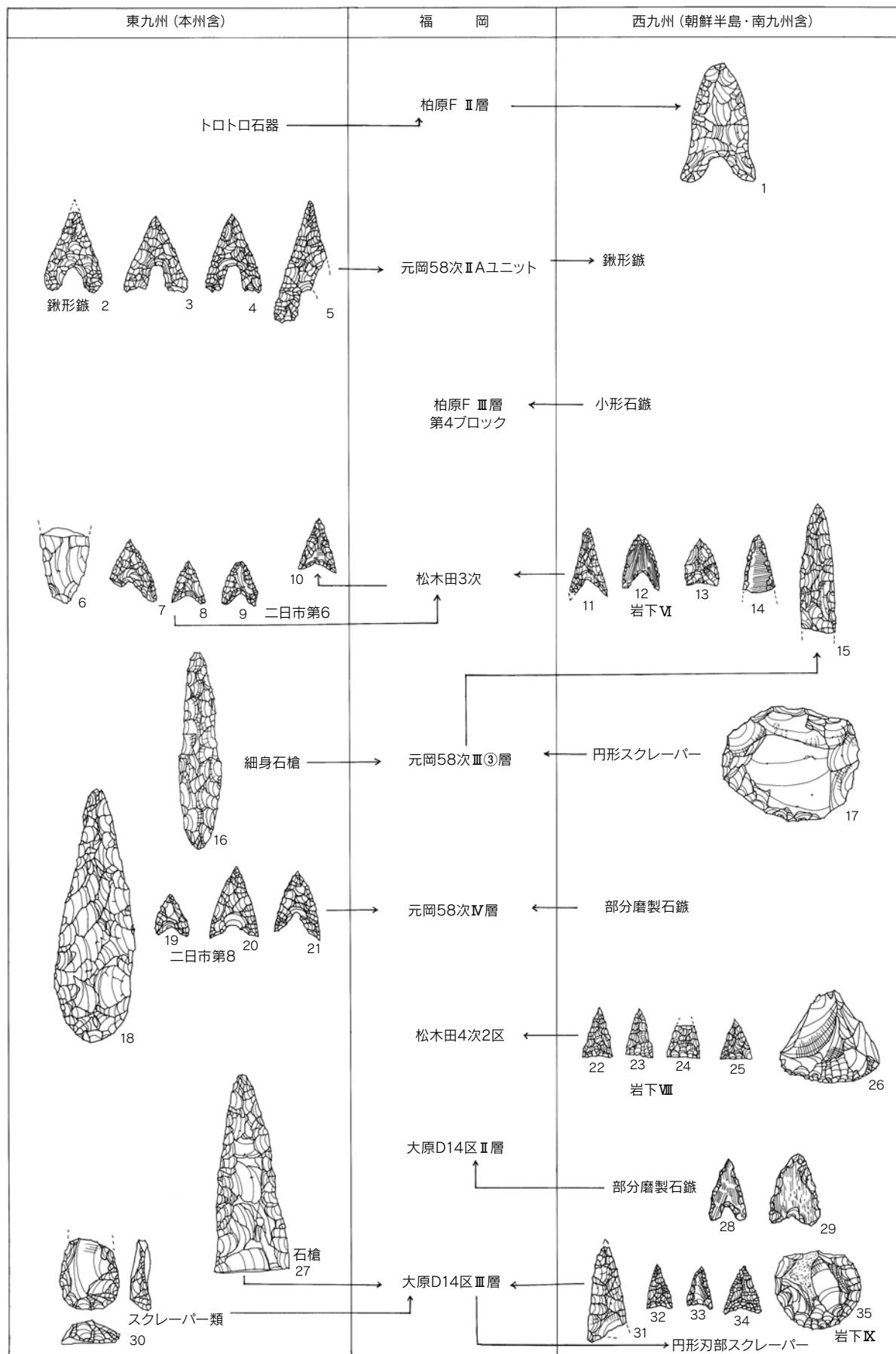


図145 石器にみる地域間交流の概念図(1/2)

層と二日市洞穴7・8文化層がおのずと対応することができる。しかし西北九州と状況は異なり、東北九州の場合は資料数が確保されているのだが、土器のセット関係の観点からも底部形態からも類似点を見出し難い状況である。唯一共通点が見出せるとすれば、条痕文土器同士を比較した際、口縁部直下の条痕文調整の仕上げ方向である。福岡地方で確認したが、傾向として古相を呈するものは横あるいは斜め方向の仕上げを行うのに対し、やや新相になると縦方向が出現する。二日市洞穴7・8文化層では8文化層が横および斜め方向のみの仕上げ手法を採用しているのに対し、7文化層では縦方向の手法が出現する。福岡地方では縦方向の手法が採用される段階は元岡・桑原遺跡群58次Ⅲ③層であり、この点を積極的に評価するならば、二日市洞穴7文化層と元岡・桑原遺跡群58次Ⅲ③層が近い時期にあるといえ、二日市洞穴8文化層はその前段階の元岡・桑原遺跡群58次Ⅳ層と併行関係が確保できる可能性が高い。しかし、土器のセット関係の観点からすると元岡・桑原遺跡群58次Ⅳ層は条痕文土器が主体であるが、刺突文土器・撫糸文土器・無文土器等各種の土器が揃っているのに対し、二日市洞穴7・8文化層は条痕文土器および無文土器で構成されている。また、底部の形態でも北部九州は乳房状尖底が主流となるが、東北九州では丸底という当該地方の伝統的な底部形態が残存している状態であり、相互比較は形態的な面からも非常に困難な状態である。口縁部形態でも、北部九州が西北九州同様に直立する口縁や緩やかに外湾する口縁部形態を有しているのに対し、東北九州では直立する口縁が優勢で存在する。口縁部の仕上げ手法以外は類似点を見出すことができず、非常に安定しない時間的同時期性を持っているが、土器にみられる北部九州と東北九州間における形態等の格差は石器でもみられることから、この時期の類似点の低さは情報の断絶を示唆していると積極的にとらえることも可能であり、現段階では口縁部下の仕上げ方法の共通性を持って同時期と判断したい。現在のところ調整方向の変化は併行関係を決定づける要素となることは困難であるが、縦方向の仕上げが採用される時期は北部九州では元岡・桑原遺跡群58次のⅢ③層や二日市洞穴7層の時期であり土質および石器の変化（円形刃部搔器の消滅と縦型のサイド・スクレーパーの出現）が見られる時期である。この現象に対して現在のところ明確な説明はできていない。調整方向は土器製作における変化を示していることが予想され、環境の変化などに対する当時の人々の適応のあり方を検討できる要素の一つとなりえる非常に重要な属性と考えられるのだが、積極的に評価できるだけの情報の抽出や分析をおこなえていないのもまた事実である。したがって、時間的に新しい時期に縦方向の仕上げ手法を採用する傾向にあるという現象の把握にとどめ、その背景は、今後の課題としたい。

東北九州とは形態上・セット関係の類似性が低く、情報の断絶があったと考えられる時期が存在したのに対し、北部九州と西北九州では見られない。刺突文土器が一定量断絶することなく確認されることからも上記の内容は首肯できる。両地域で見られる刺突文土器は大塚達郎氏によって、新潟県壬遺跡出土の円孔紋土器に後続する続円孔紋土器として提唱された「柏原式土器」である（大塚1991）。大塚氏が提唱した当初は、草創期末に位置づけられていたが、調査例が増加するにしたがって「柏原式土器」と称される刺突文土器群は、福岡を中心とする北部九州では、押引手法を用いた刺突文や円形・角形等の形状のバリエーションを持ちながら継続して使用され、元岡58次Ⅱ層で見られるような装飾性の高いものや柏原F遺跡Ⅲ層で見られるような瘤状隆起を貼り付けるものまで発展し、最後は押型文土器へも採用されるまで存在することから、時間幅のある土器であると認識を変える必要があろう。福岡地方でみられる刺突文土器の流れは西北九州においても、泉福寺遺跡3層→天神洞穴→岩下V層で同様の流れを辿ることができ、刺突文土器の前段階、つまり、大原D14区の条痕文土器段階における西北九州との交流、さらには早期を通した絶え間無い情報の行き來を示唆するものであると考えられる。石器石材に大原D段階から針尾島や松浦産の黒曜石を使用したものが多く見られることも、絶え間なく西北九州との人・情報の往来があったことを傍証するものとなっている。

以上のように、西北九州・北部九州・東北九州と比較検討したが、おおむね変化としては底部形態や土器のセット関係等で同様の変化をたどることが確認できた。一部、土器だけでは比較検討が難しい時期もあり、併行関係として妥当性が低い部分もあったのではないかと思われる。しかし、上記のような流れでとらえることが可能であり、断続的に交流がみられる西北九州と一時的に情報の行き来が断絶する東北九州という両地域との交流の動態や垣間見られたのではないかと考える。しかし、いまだ不十分な編年試案であるため、今後修正を加えながら、縄文時代草創期から早期にかけての地域間における情報の流れ・動きを明らかにしていくことが必要である。

石器からみた地域間交流

岩下洞穴と二日市洞穴は遠く離れているが、堆積土には共通点が認められる。両者ともに、赤色土には押型文土器、白・灰色系の土層には平底の条痕文土器や無文土器が含まれていたのである。前者は温暖期、後者は寒冷期に形成された土壌と考えられる。白・灰色系土層の岩下IX・VII層と二日市9・8文化層は、寒冷化の著しいヤンガー・ドリアス期の所産と考えられ、縄文草創期末あるいは早期初頭に位置づけられる。堆積土の色調等は、遠く離れた遺跡間における編年の基準になりうるのである。赤褐色土は岩下IVB・IV層、二日市4文化層上部に認められる。この時代は縄文時代最温暖期（ヒプシサーマル）よりも前であるが、急激に温暖化する時期である。

福岡地方は火山灰に恵まれず、鍵層となる堆積土も確認されておらず遺跡間の比較が困難で、編年関係の構築に支障があった。ところが、小規模な河岸段丘に形成された崖下遺跡は堆積土が厚く、土石流堆積物など共通点も多いように思われる。さらに、柏原F遺跡は赤色土、松木田遺跡は白・灰色系土壌の堆積も認められる。大原D遺跡14区も灰色系土壌を基調としている。元岡・桑原58次地点では微量ではあるが火山灰も確認されており、近い将来層位による比較が可能になる可能性がある。

石器群の形態的特徴などから、岩下IX（図145 31～35）・VII層（22～26）や泉福寺4層（28・29）と同時期なのは大原D14区III・II層（池田1997、池田ほか2003）、松木田4次2区（長家ほか2013）、元岡・桑原遺跡群3次地点下層（菅波ほか2004）と考えられる。スクレーパー類の形態的特徴など類似点は多く、石鏃の変遷も一致し、大原D14区IIIa層段階頃、部分磨製石鏃も登場する。両地域は継続的な交流があり、石器の素材を供給する西北九州から石器製作技術を学習したと考えられる。その素材生産技術も共通しており、小形スクレーパー類（26・35）や石鏃（22～25、28・29、31～34）の製作は西北九州の黒曜石と結びつき、成立したと考えられる。寒冷化に伴う気候変動により人類の移動が考えられ、搔器（30）や石槍（27）が北方（東方）から齎された可能性が強い。福岡や西北九州では円形刃部搔器（26・35）に寒冷適応が顕在化しているが、石槍は粗雑なものが多く、形態的に完成しているとは言えない。

二日市洞穴第9・8文化層は細長の石槍は認められるが、円形刃部スクレーパーは顕著な存在ではなく、地域による違いが認められる。二日市洞穴第9文化層は、細長の二等辺三角形鏃があまり認められず、西北九州や福岡とは異なる原理と思われる。また、脚部を明確に作り出す事例が多く、大原D遺跡14区II層や岩下洞穴IX層より新しく、元岡・桑原58次地点IV層の直前である可能性もある。第8文化層は58次地点IV層とほぼ同時期と考えられ、脚部の抉りに共通点がある。ただし部分磨製石鏃は認められないが、脚部下半部が円味を帯びるものを組成している。円形刃部搔器は目立つ存在でない。この点は、九州の他の地方と大きく異なっている。この頃の東九州は、福岡や西北九州との交流が全体に及んでおらず、欠落する要素が多数存在するものと思われる。

脚部が丸味を帯びる円脚鏃は、桐山和田遺跡（奈良県立橿原考古学研究所2002）など本州の草創期遺跡に特徴的に組成されている。九州でも、宮崎県の清武上猪ノ原遺跡第5地区第14号住居址（清武町教育委員会2005）や東畦原第1遺跡4次調査地点（宮崎県埋蔵文化財センター2006）に類例が認められる。これらは隆帶文土器と共に伴する可能性が高く、大原D遺跡III層よりやや古く位置づ

けられる。二日市洞穴の石鏃もこれと無関係ではないと思われ、縄文草創期後半、東九州の石鏃は本州地方の影響下にあった可能性が指摘出来る。大原D遺跡にも脚部の尖る石鏃が若干組成されていることから、福岡地方もその影響を受けた可能性が否定出来ない。

大原D・元岡型スクレーパーのように、福岡に特有のものも存在する。西北九州では類似資料は認められるものの、福岡地方のような特殊な発達は確認出来ない。3地域はそれぞれ独立を保ちながら、共通点も認められる。石鏃の形態は西北九州ほどの共通性はないが、東北九州も基本的には同じ原理で変遷していると考えられ、三地域間で何らかの交流があつたものと思われる。

元岡・桑原58次地点第IV・Ⅲ③層もこの寒冷期の所産と考えられ、円形搔器や完成した大原D・元岡型スクレーパーなどこの時期特有の石器が認められる。58次地点第IV層直前の様相が岩下洞穴Ⅷ層に認められ、石鏃形態の変化点と言える。二日市洞穴第8文化層（18～21）は脚部の尖る石鏃（19～21）を主体とし、58次地点IV層に対比できる。脚部の抉り（21）にも共通点が認められる。北（東）方の影響で58次地点第Ⅲ③層にかけて石槍が定型化し、優美な細長製品（16）が組成されるようになる。これらの石器群は、次の段階へと繋ぐものと言えよう。

寒冷期は、一般的に暖かさを求める動物群が南下しており、人類集団の一部も南下する可能性がある。大原D・元岡型スクレーパーは、西北九州や東北九州で典型例は検出されていないが、愛媛県上黒岩岩陰には形態的に類似するスクレーパーが認められ（春成・小林編2009）、何らかの影響を受けたものと思われる。大原D・元岡型スクレーパーは、当初（ヤンガー・ドリアス期初頭）東方の影響を受けているが、早期初頭（ヤンガー・ドリアス期後半）にかけて福岡地方で独自に発達したものと思われる。また、南九州の建昌城跡（深野ほか2005）は上げ底の土器と共に三角形鏃、円形刃部搔器が纏まって検出されている。石鏃は正三角形鏃中心で、二等辺三角形鏃を若干含み、浅い抉りのあるものが多い。円形刃部搔器の中には、背面細調整を施したものもある。この遺跡は大原D遺跡14区との共通点が多く、集団の接触の結果生じたものと思われる。

しかし、大原D遺跡の石器は建昌城跡よりも岩下洞穴や泉福寺洞窟との共通点が強く認められ、両地域の交流が強固で継続的と考えられるのである。この頃部分磨製石鏃が出現するが、その出現時期と形態的特徴は良く一致している。この点は東北九州や南九州と全く異なるのである。東北九州における磨製石鏃の出現は早期になってからであり、南九州は全磨製石鏃が検出され形態的に異なっている。石槍は東北九州で完成品が認められるが、福岡や西北九州では定型化していない。この点からも、東九州が本州（瀬戸内）の影響をより受けていると考えられる。

草創期末（ヤンガー・ドリアス期）の福岡は、寒冷化の対応するため南向きの崖下遺跡を主な生活拠点とし、季節的な移動も考えられる。大原D遺跡14区は、主に住居址単位で黒曜石原石が認められ、SC014は200g強の円礫が出土している。58次地点II層のデボと異なり剥離痕のないものが多く、この時代はその採取に赴いていた可能性も考えられる。前述のように、文化要素が広範囲に認められることから、地域集団の行動も広範囲に展開したと思われる。

温暖化と共に円形刃部搔器が姿を消し、縦型のサイド・スクレーパーが出現する。石槍も58次地点第Ⅲ③層からの発達が認められ、その割合も高くなり、細長の部分磨製石槍も組成される。これを代表するのが松木田3次地点（米倉2001）である。石鏃の変化点でもあり、下部縁辺が円味を帯びるもののが出現し、岩下洞穴VI層（11～15）、二日市洞穴第6文化層（6～10）も同時期と考えられる。二日市洞穴では第6文化層以前にも円味を帯びる石鏃が認められることから、東方からの影響であると考えられる。福岡地方や西北九州は、縄文草創期末から早期初頭にかけて円脚鏃は認められない。松木田3次地点以降の短期間、小形円脚鏃が姿を現すのである。温暖期は動・植物相の北上が認められ、これを追い人類集団も北へ向かうと考えられる。その過程で、東方（本州）から文化の影響を受けたと考えられる。この時代3地域の交流は密度が高く、西北九州の細長石槍や二日市洞穴第6

文化層の部分磨製石鏃は福岡地方から学習し製作したと考えられる。

撫糸文土器を主体とする松木田3次地点と、刺突文土器主体の柏原E・F遺跡（山崎ほか1983・1987・1988）などとの前後関係について、見解が分かれている。前述のように、石器からは松木田遺跡の方が古いと考えられる。そのほうが、石鏃や石槍の変遷が良く理解出来るのである。新しい要素の展開についても矛盾点は認められない。58次地点第Ⅲ①・②層は刺突文土器主体の文化層で、石槍の発達は弱く、松木田遺跡に特徴的な縁辺が円味を帯びる石鏃を組成している。ただ、刺突文土器は西北九州では草創期に既に成立しており、福岡地方の早期初頭に既に存在している可能性が多いにあり、大原D15-3区には古い段階のものも含まれている可能性がある。

部分磨製石鏃や石槍、縦型のサイド・スクレーパーなどは西北九州との類似点が認められ、引き続き石器石材を通じた交流により、その形態にも影響を与えたのである。腰岳・針尾島・松浦の黒曜石や西北九州の安山岩が使用され、定型石器の製作も学習したと考えられる。福岡の地域集団との間に、強固な関係が継続しているものと思われる。松木田遺跡の段階では地域間の交流が進んだと考えられ、3地域間で共通点が認められる。石槍の発達や円形刃部搔器の終焉は、生業に何らかの変化があったものと思われる。遺跡立地にも違いが認められ、河川流域の広く開けた微高地に進出するようになるが、崖下遺跡も引き続き利用されている。

福岡では松木田遺跡3次地点をピークに、柏原F遺跡Ⅲ層などでは部分磨製石鏃や石槍の割合が急激に低下する。スクレーパー類の割合も低くなり、形態的に変化する。早期前葉は脚部の尖る石鏃と、部分磨製石鏃、細身の石槍、縦型のサイド・スクレーパーによって特徴づけられるが、押型文土器と共に鍬形鏃（2～5）が出現し、石鏃の転換点となっている。早期前葉に小形化の著しかった石鏃は鍬形鏃の登場により大形化している。大形鍬形鏃の出現と共に石槍が減少し、磨製技術も極端に衰える。剥片剥離技術も一つの完成形が見られ、両面へ剥片剥離を行う円盤状石核や柏原型石核が発達する。石鏃の素材を剥離する技術は、長い時間をかけて最もふさわしい剥離技術を手に入れたことになる。前述のように、大形剥片を素材とする柏原型の普及で一つの完成を見ると思われる。松浦や針尾島産の円礫素材から、腰岳の角礫を開発することによって、このような変化が生じたのであろう。

鍬形鏃は、押型文土器と共に本州方面から伝播したと考えられる。鍬形鏃と相前後し、トロトロ石器（1）も登場する。この広域の地域集団間交流は、気候変動と何らかの関係があるものと思われる。スクレーパー類も再び円形刃部搔器の発達が認められる。この形態は寒冷期に発展する形態であり、なぜ温暖期に出現するのか明らかにされていない。恐らく、北（東）方との交流によりその製作技法や使用方法を学習したのではないかと思われる。

対馬暖流が本格的に日本海へ流入し、温暖化がさらに進展したのもこの時代（押型文土器の文化期）と考えられ、海との関わりが強くなったと考えられる。58次地点II層では石錘が検出され、当時山奥の洞穴遺跡であった岩下洞穴でも海産の魚類や貝類が出土している。このことは、季節的移動の中に海岸部が組み込まれたか、海の集団との交流が想定されるのである。海水面の急激な上昇は、人類と海との関わりを強めることになったと考えられ、石錘の存在から、地域集団の行動領域のなかに海岸部が組み込まれるようになったと思われる。

石器石材による西北九州との関係は、引き続き維持されている。黒曜石を採取するため針尾島に赴いたかが問題となるが、58次地点第II層デボ出土品の多くが接合することから、石質を見る行為を含めて遺跡内で行っており、他の集団により運ばれてきた可能性が高いと考えられる。大原D遺跡とは明らかに異なっており、集団関係に変化が生じている。押型文土器の東方からの伝播と共に、石器製作技術に留まらず、生業や集団関係にも変化が見られるのである。

引用・参考文献

- 麻生優1968『岩下洞穴の発掘記録』（佐世保市教育委員会）
- 麻生優編1985『泉福寺洞窟の発掘記録』（佐世保市教育委員会）
- 池田裕司1997『大原D遺跡群2』（福岡市埋蔵文化財調査報告書第507集）
- 池田裕司・菅波正人・山口譲二・吉留秀敏・荒牧宏行・星野恵美2003『大原D遺跡群4－大原D遺跡群第4次・第5次・第6次調査報告 縄文時代編一』（福岡市埋蔵文化財調査報告書第741集）
- 大塚達郎1997「九州地方の縄文草創期編年と泉福寺洞穴」『縄文時代』2－縄文時代文化研究会
- 川内野篤編2003『菰田洞穴発掘調査報告書』（平成14年度佐世保市埋蔵文化財発掘調査報告書）
- 清武町教育委員会2005『上猪ノ原遺跡第5地区』（清武町埋蔵文化財調査報告書第19集）
- 栗田勝弘・高橋信武・渋谷忠章・坂本嘉弘1984『野津川流域の遺跡V－新生遺跡・下藤遺跡』（野津町教育委員会）
- 菅波正人・吉留秀敏・池崎譲二・松村道博2004『元岡・桑原遺跡群3－第3・4・8・11次調査の報告』（福岡市埋蔵文化財調査報告書第829集）
- 坂田邦洋1972『縄文時代に関する研究－成仏岩陰遺跡の調査－』（国東町文化財調査報告書）
- 竹野孝一郎・綿貫俊一2004『大分県二日市洞穴－分析編－』（大分県九重町教育委員会）
- 橋昌信1980『大分県二日市洞穴発掘調査報告書』（別府大学博物館）
- 堤隆2000「搔器の機能と寒冷適応としての皮革利用システム」『考古学研究』第47巻第2号
- 長家伸・米倉秀紀・加藤隆也2013『松木田3－松木田遺跡第4次調査1～3・7・8区の報告』（福岡市埋蔵文化財調査報告書第1204集）
- 奈良県立橿原考古学研究所2002『桐山和田遺跡一大和高原における縄文時代草創期と早期の遺跡発掘調査報告書一』（奈良県文化財調査報告書第91集）
- 萩原博文2001『縄文草創期の細石刃石器群』『日本考古学』第12号
- 萩原博文2008『泉福寺洞穴の縄文草創期石器群』『九州旧石器』第12号
- 春成秀爾・小林謙一編2009『愛媛県上黒岩遺跡の研究』（国立歴史民俗博物館研究報告第154集）
- 深野信之・上杉彰紀・松本茂2005『建昌城跡－平成11～15年度発掘調査報告書－』（鹿児島県姶良町文化財発掘調査報告書第10集）
- 宮崎県埋蔵文化財センター2006『東畦原第1遺跡（三・四次調査）』（宮崎県埋蔵文化財センター調査報告書第128号）
- 山崎純男・小畠弘己1983『柏原遺跡群I－縄文時代遺跡F遺跡の調査』（福岡市埋蔵文化財調査報告書第90集）
- 山崎純男・小畠弘己1987『柏原遺跡群IV－縄文時代遺跡A－1・E遺跡の調査』（福岡市埋蔵文化財調査報告書第158集）
- 山崎純男・小畠弘己1988『柏原遺跡群V－先土器・縄文時代遺跡A－2・C・H・J～N遺跡の調査』（福岡市埋蔵文化財調査報告書第190集）
- 米倉秀紀2001『松木田遺跡群2－第3次下層（縄文時代早期）遺物編』（福岡市埋蔵文化財調査報告書第686集）
- 米倉秀紀2001「福岡の縄文時代初期－環境と生業の復元にむけて－」『海峡の地域史－水島稔夫追悼集－』水島稔夫追悼集刊行会
- 綿貫俊一1999「九州縄文時代草創期から早期の土器編年に関する一考察」『古文化談巖』第42集